

2008年2月7日

意見陳述

原告 ●●●●

今回裁判に提訴するに至った経緯及び私の心情について申し述べたいと思います。

私が客室乗務員監視ファイルについて知ったのは昨年2月に発行された週刊朝日の記事でした。書かれていた内容の酷さに衝撃を覚えたのはもちろんですが、それ以上に会社は分裂労務政策を推し進め合理化を進めるために、被告 JALFIO にこんなことまでさせていたのかと驚きました。

監視ファイルの私のページには、私が昇格男女差別の是正について女性少年室に調停を申し立てたことや社内の苦情処理制度を利用したことなど、会社と私しか知りえないことまで記載されています。これは会社の関与なくしてはあり得ない事です。

さらに、私が一番強い怒りを覚え、裁判への提訴を決心した最大の理由は、ファイルに私の日々の行動が監視されていた記述があったからです。

例えば「署名活動」との記述です。私は、先輩が労災認定されるようにと、宿泊先で署名を同僚に依頼したことが何度かあります。その時はみんな快く署名してくれ感謝したものでしたが、その陰でいったい誰が報告したのかと仲間への不信感を抱かざるを得ません。

また、私自身でさえ確かな記憶のない日のフライトについて、「組み合わせがよくない（「組み合わせ NG」）」などと誰かに判断され、ファイルに記載されていたのです。日々のフライトのことが、しかも会社から遠く離れた宿泊先での出来事までもが見知らぬ誰かに把握されていたということを知り、とても気味が悪くなりました。このような監視ファイルが綿々と何年もの間、被告 JALFIO 執行部に引き継がれ、私が一度も会ったことの無い人たちに共有され、何人もの目にさらされていたと思うと強い憤りを感じます。

私の後輩であり、被告 JALFIO の組合員でもある乗務員はファイルの記述を見たときに「いったい誰がこのコメントを書いたのだろう？」と思ったそうです。彼女は、私に言いました。「まわりにいる人が全部敵のように思えた。腹が立ってフライト中笑顔も出なかった」と。

彼女のような被告 JALFIO 所属の組合員は、契約社員時代から厳しく管理された経験からか「上司からにらまれるのが怖い」という思いが強く、なかなか

声をあげられないでいます。でも、彼女らも皆、不安や不信を抱えているのだと実感するのは、今でも職場で何かあると「このこともファイルにのるかもね」と冗談めかして話されることが間々あるからです。

大きな航空機内では、全ての異常事態がひとりで把握できるわけではありません。そのため、乗務員がお互いの情報を共有し、お客様を安全に脱出させることが求められます。つまり、緊急事態が起きたとき、何にも増して必要なのは乗務員間のチームワークと信頼です。監視ファイルが作られ、お互いが疑心暗鬼になり信頼関係も薄れているような職場で、私たち客室乗務員の最大の仕事である保安任務がまっとうできるのか。私は大変疑問に思います。

信頼しあい何でも話し合える風通しの良い職場にする為に、お客様にも安心して選んでいただける会社にする為に、二度とこういうことが起きて欲しくないと今回裁判の原告になる決心を致しました。裁判所には一日も早く公正な判断を出していただき、明るく働きやすい職場にしたいと思っております。